

論文三ノ二 イギリス人貿易商ブラドツクの震災詳録

突然群衆の悲鳴が聞えました。「海が来る！みな浚われる。」四マイルほど離れた河の方を見遣ると、風もないのに波濤がきわめて異様に隆起し、拡大しています。すぐさま山のように巨大な高潮が間近に迫りました。激しい海鳴りとしぶきで押し寄せ、激しく陸岸を驀進するので、必死になつてみな逃げます。その場で多数が命を失い、水辺から遠く隔たるところでも人々は腰まで水に浸りました。私自身も九死に一生を得たのです。同じく急激に海嘯が退くまで、地面に転がる大きな角材を握り続けなければ、命を失つたでしょう。同じ頃近くに投錨していた小舟や小帆船も渦潮に呑み込まれ、完全に消えました。

- 第一節 十一月一日午前十時河岸地区ベレン||リスボン街道 地震の発生
- 第二節 十一月一日午前十時 河岸地区ナオス河港 津波の襲来
- 第三節 十一月一日午後 河岸地区造幣局 掠奪への防禦
- 第四節 十一月一日夕宵 シアード地区アルマダ新街 住民の惨状
- 第五節 十一月一日夜 リスボン市街 火災の拡大と盗賊の跳梁
- 第六節 地震発生の数日後 さまざまな被災者の状況
- 第七節 一七八〇年 ロンドン ブラドツク書簡の刊行

第一節 十一月一日午前十時河岸地区ベレン＝リスボン街道 地震の発生

ポルトガル領マデイラ島はリスボンの西南千キロ、太平洋に浮ぶ島影のひとつである。明媚な風光と温暖な気候を求めて欧米各地から旅行者も多いが、とりわけワインの産地として著名である。一七五五年には複数の震央が連動して地震の規模を巨大にしたが、最大の震源地はリスボンから千キロ、サン・ビサンテ岬から二百キロ隔てたアゾレス・ジブラルタル断層帯と推定される。この海底に近いマデイラ島では以前にもときに大きな地震が発生した。モレイラ・デ・メンドンサ著『世界地震通史―リスボン大地震』はつぎのような記録が見出される。「【第四六二項】この年（一七四八年）マデイラ島では強烈な地震が被害を惹き起した。三月三十一日夜半に最初の震動を一度か二度感じたが、とくに被害はなかった。その後一層烈しい震動が二度発生し、島の建物がほとんどすべて破壊された。けれども、死亡した住民は四名に止まり、大きな被害を免れたと言える。陸地に大きな亀裂が生じ、立ち昇る火焰が異常な熱さを感じさせた。」①

このときマデイラ島に滞在し、地震を体験したイギリス人貿易商ブラドックは、一七五五年十一月一日の朝リスボンのサンタ・カテリーナ教区、ナオス河港近くの自宅にいた。のちに彼が祖国の高位聖職者に宛てた書簡は、チェイズの記録と並ぶ長大な被災証言である。以下これを「貿易商ブラドックの震災書簡」と題して、いくつかの項に分割し、順次補足的な説明を付加する。

貿易商ブラドックの震災記録 その一

リスボン、一七五五年十一月十日

ブラドック

ノルヴィッチ主教区宗教法顧問

サンドバイ神父宛

これより愉快的事柄をあなたに伝えることができ、ロンドンで嬉しくあなたにお会いできれば、私も得心できるでしょう。しかし、神は他を命じられました。訴訟で蒙った多くの遅延や屈辱についてはさきの手紙にも書いたので、それ以上の委細であなたを悩ますことは致しません。すでにそれは終局に達し、経費、損害、利益に関し当方に有利な判決を得た、とだけ申し上げます。しかし、そうした決定によつてすこしでも得になるか否かは、現在不確かなのです。なぜなら、当地の事態はきわめて流動的であり、だれしも財産の喪失よりも自身の安否を憂慮しているからです。

かかる部類の出来事は多年の間世界のどこにも発生しておりません。歴史に記録されるもつとも凄絶な惨事について証言をお届けしますが、私自身もその渦中にあつたことで、信憑性を確信して頂けると存じます。かかる部類の出来事は多年の間世界のどこにも発生しておりません。歴史に記録されるもつとも凄絶な惨事について証言をお届けしますが、私自身もその渦中にあつたことで、信憑性を確信して頂けると存じます。

十一月一日ほど心地よい朝はかつてなく、太陽が燦然と輝いていました。天空も静穏かつ晴朗であり、迫りつつある出来事、人口稠密で繁栄する王都を脅威と荒廃の局地に一変させる出来事の予告や警鐘はなにもなく、僅かな前触れから瞬時にして総体的壊滅に到つたのです。

その運命の日朝の九時から十時までの間に私は居室に座り、手紙を綴っていました。そのとき書いている便箋と机が緩やかに揺れ始め、風もないので奇妙に感じます。なぜかと思ひながら、本当の原因を確かめるまでもなく、建物

① Joachim Joseph Moreira de Mendonça, *Historia Universal dos Terremotos*, Lisbon, 1758, p.109.

全体が根底から揺れ始めました。いつも大道を走る四輪馬車が、今日は数台ベレンから王宮へ向かう響きか、と当初私は考えました。しかし、一層注意深く聴いて、己れの錯誤を悟り、稀有にして戦慄すべき地下の轟音、空洞を走る雷鳴の轟音に似たものと思いました。これらが一分足らずの間に念頭へ浮かび、この轟音は地震の前兆かもしれない、と鈍重な私もようやくここで心を引き締めました。ほとんど被害はなかったが、六年か七年前にマデイラ島で同様な異変が生じたことを想起したのです。

筆を投げ出して、私は立ち上がりました。居室に留まるべきか、街路に逃れるべきか、どちらにいても危険であろう、と咄嗟に考えます。マデイラで経験したのと同じく、この震動も大した被害は起こすまい、とも私は暢気に思いました。しかし、つぎの一瞬夢想を打ち破るように、凄まじい衝撃が襲いかかり、あたかも王都のすべての建物が一挙に壊滅したように感じたのです。

私が住む建物も強烈な衝撃を受け、上方の各階がすぐに崩れました。自分の居室（一階）はそこまで到らないものの、すべてのものが激しく放り出されます。左右に内壁も揺れ続け、いくつかが裂け間も生じたので、懸命に身を支えながら、碎かれて死なぬようにとだけ願いました。崩れかかる四方から大きな石が落下し、屋根よりは籬の先端が飛び出したのです。こうした怖ろしい光景に加えて、天空が突然薄暗くなり、事物の判別ができません。あたかもかのエジプト人の暗闇のようです。埃と灰の膨大な雲が激しい地変から発したに違いありません。硫黄質の発散と報告した人もいますが、私には判りません。確かであるのは、十分あまり茫然としたことです。

濃霧が消え始め、衝撃がやや鎮まるや、最初に室内に認めたのは、子どもを抱き、泥塗れで床にうずくまる婦人でした。蒼白の顔で、身震いしています。どうしてここへ来たかと尋ねても、どう逃げてきたか、動顛のあまり説明できません。察するに彼女は揺れ始めたとき、自宅を跳び出し、落下する石材に身の危険を感じて、私の邸宅の門口に避難したのです。そこも同様に危険であつて、震動が強まると灰塵と瓦礫に襲われたため、階段を駆け上り、開けたままの私の居室に入ったのでしょう。いずれにしても、問い糺す余裕はありません。もうこの世の最後でしょうか、と極度に悶えながら彼女が問うたことだけを覚えています。同時にまた胸が苦しいこと、すこしでも飲み物が欲しいことを訴えました。そこで私は大きな水瓶を納めた戸棚に寄りましたが、それも微塵に割れています。（ご存知のようにリスポンでは水瓶は珍しい調度です。）命が惜しければ、渴きなど忘れなさい、と私は彼女に申しました。頭上ではいままも家屋が崩れかかり、もう一度揺が来れば、かならずふたりとも下敷きになる、と。彼女を私は腕に抱え、安全な場所へ運ぼうと決意したのです。

このとき偶々私が部屋着のままであつたことを、格別の神慮といつまでも感謝します。起床して友人と朝食を摂つたならば、服装も整い、最初の震動で街路に跳び出したでしょう。自宅にいた多くの人々は、そのようにしてみな脳天を碎かれたのです。しかし、危機に直面しつつも、沈着に考えたのは、いまの身なり、部屋着とスリッパだけでは瓦礫を越え切れぬことです。したがつて、冷静な心をなお失わず、所持品のうち手元にあつた靴と上着を身に付けました。婦人を脇に抱え、こうした服装で階段を駆け降り、テージュ河に出る街路の一角へ来ました。しかし、建物の倒壊によつて二階の高さまで道路が埋め尽され、主要道路（王宮へ向かう大通り）へ進む他の一角へ私は戻ります。婦人を助けて、延々たる瓦礫の山を越えるのは、私の生涯における大きな賭けでした。その道路を進むうちに、両腕両脚で支えなければ、越えられぬ地点があり、彼女に手を放すように言いました。それに従つて私から二ヤードほど離れて立ち止つたのですが、その瞬間揺れ動く障壁から巨大な石材が落下し、婦人と子どもを打ち砕きました。あまりにも凄惨な光景で生涯脳裡に刻まれています。己れにも同じ運命が降りかかるかと戦慄し、周囲のあちこちに同じ光景が現出するため、一刻もそこに留まれないほど動顛したのです。①

① Braddock, Letter to Reverend Dr. Sandby dated 13 November 1755, in Charles Davy, *Letters addressed chiefly to a young gentleman upon subjects of literature*, volume II, pp.12-20.

ナオス河港北の自宅はリベイラ王宮から近郊のベレンへ向かう街道沿いにあった。万聖節の朝居室で最初の衝撃を受けたブラドックは、地中からの轟音と天空の暗雲を明確に証言する。より強烈な第二の衝撃に身の危険を感じ、居合わせた未知の親子を庇護して河港の空地へと脱出を急ぐ。しかし、そこへの通行が遮断されており、彼らは街道に出て、サン・パウロ教会の広場へと向かう。ブラドックが連れ添う親子は、そこであまりにも痛ましい最期を遂げた。

第二節 十一月一日午前十時 河岸地区ナオス河港 津波の襲来

十三世紀の末葉サン・ジョルジェ城からの王宮移転に先立つて、河岸地区に王立造船所とナオス・ドックが創設され、大航海時代の重要な拠点が形成された。フランカ著『啓蒙の都市ーポンバルのリスボン』には以下のように説明されている。「そこには海運に係わる人々、水先案内人、船大工、香料貿易商などのため、質素な住宅が建設された。とりわけ一五三一年の地震以降こうした新規の人々が新しい地域を求めたのである。三年以内に竣工しなければ重税を課するとの制約のもとでそれらは大急ぎに施工された。険しい坂が多く、起伏に富む土地であるため、すべての道路がくねくねとし、登り降りするのである。」①

リスボン在留の外国人は、貿易商のゴダールやフォークトのように大聖堂周辺やバイシャ地区のサン・ニコラウ教会周辺に大抵居を構えたが、ナオス河港と交易の市場に近い河岸地区に住む貿易商もあった。一六世紀前半にコルト・サント広場裏手の一隅がポルトガル王権から貸与され、在留民の交流の場とされていた。ポルトガル通商の拠点である英国商館も、この広場一帯のフローレス街に構えたのである。

庇護する親子の即死に慄然とした彼は、それを弔する余裕もなく、進路を転じて細道へ入った。イギリスの研究者エドワード・ペイスの考証によれば、この道はボア・ヴィスタ右街であつて、働く人々や貧しい階層が密集する街路である。②

貿易商ブラドックの震災記録 その二

ついで延々たる細道に差しかかると、両側には四階建て、五階建てのきわめて古い住居が連なり、大半がすでに倒壊したか、崩れつつあります。通行する者は一歩一歩死の危険に踏み込むようで、私の前方には多く人たちが死んで横たわるか、一層悲惨なことには重傷で身動きできずにいました。自分とは言えば、一気に絶命したいという気持ちでした。手足を砕かれた場合には、放置されるだけで、これら不幸で哀れな人たちと同じく、だれからの救助も得られないのです。

しかしながら、自己保存こそ自然法の第一であつて、そうした陰鬱な想念にながくは捉われず、絶望的な心境を回避できました。極度の用心をしながら可能なかぎり急ぎ足で前進し、ついに怖ろしい通路を抜けた私は、サン・パウロ教会前の大きな広場で自己の保全と無事を確認しました。教会自体は数分前に倒壊し、参拝者の大半が下敷きとなりました。そこはリスボンでもっとも人口稠密な教区のひとつとされ、参拝者がいつもきわめて多いのです。しばらくそこに立ち止つて、どうすべきか思索しましたが、その状況では到底安心できず、教会西側の瓦礫を越えて、河岸へ辿り着こうと決意します。第二の震動を危惧して、揺れ動く建物からできるだけ速く遠ざかろうとしたのです。

辛苦して決意を断行しましたが、ここで私はあらゆる地位や身分の男女から成る夥しい群衆に出会いました。そのなかに総大司教教会参事会員の幹部数名が認められ、イギリスの主教と同じくみな紫色の聖衣を着ています。幾人かの聖職者はミサの最中に式服のまま祭壇から逃げ出したのです。半裸の婦人も素足の女性もいました。彼らはみな

①

② Edward Paice, *Wrath of God, the Great Lisbon Earthquake of 1755*, London, 2008, pp.76-77.

同じ危険に曝されてここへ避難し、跪いて祈祷を続けますが、死の恐怖に憑かれた表情で胸を震わせ、「神よ、お慈悲を！」と絶え間なく叫ぶのです。

襟垂帯と白い聖衣を身につけた尊い聖職者、サン・パウロ教会から脱出したと思われる老聖職者がこうした群衆のなかに私は見出しました。たえず彼はあちこちへと動いて、人々に悔悛を勧め、安堵に導こうとしています。聖職者の言によれば、溢れる涙とともに嘆きつつ神は、人々の罪過に憤激を示されたのです。しかし、聖母マリアに懇願すれば、彼らのため執りなしをされるでしょう。みな聖職者の周りに群がって、彼の祝福を熱心に求め、近づいて聖衣の裾に触れれば、幸せになれると信じています。数人は小さな木製の十字架と聖像を携え、接吻するよう私にも差し出しました。見覚えのある哀れなアイルランド人も聖アントニオ像を私に示しました。そうした儀式は免れたいので、彼の手を脇に除けると、神を信じないのか、憤ったように詰問します。信心に凝り固まった多くの人たちが、哀れにもわが子を見殺しにしないで、無益な木像を救い出したことは確かです。とはいえ、彼らの迷妄を嘲笑する気であるなどと、思わないでください。憐憫の情を深く浸り、共感を抱いてそうした感動的な光景を初めて見たのです。悲痛なため息や嘆きとともに彼らの流涙はきわめて非情な心をも揺り動かしたでしょう。彼らの真中で私は膝を屈し、同じく熱心に祈りました。ただし、独自の望みを主としたもので、唯一なる神が私の祈りを聴かれたら、どうか救援の手を賜るよう願ったのです。

こうした礼拝の最中に第二の震動が発生し、最初ほど強烈ではないものの、すでに被害を受けた建造物を完全に倒壊させました。人々の恐慌状態が遍く拡がり、かなり離れたサンタ・カテリーヌの丘、夥しい群衆が避難する山頂から、「神よ、お慈悲を！」という叫喚がはつきり聞えます。同時にその教区教会が倒壊するのを耳にし、やはり多くの人々が死亡したり、瀕死の重傷をうけたのです。辛うじて足腰を支えたと誌せば、第二の震動の強さを判断頂けるでしょう。しかし、それは一層戦慄すべき災禍を伴っていました。突然群衆の悲鳴が聞えました。「海が来る！みな浚われる。」四マイルほど離れた河の方を見遣ると、風もないのに波濤がきわめて異様に隆起し、拡大しています。すぐさま山のように巨大な高潮が間近に迫りました。激しい海鳴りとしぶきで押し寄せ、激しく陸岸を轟進するので、必死になつてみな逃げます。その場で多数が命を失い、水辺から遠く隔たるところでも人々は腰まで水に浸りました。私自身も九死に一生を得たのです。同じく急激に海嘯が退くまで、地面に転がる大きな角材を握り続けなければ、命を失つたでしょう。同じ頃近くに投锚していた小舟や小帆船も渦潮に呑み込まれ、完全に消えました。（難を避けて乗り込んだ人たちを、それらは満載していました。）

そこへは指呼の間になっていたのですが、凄まじい出来事をみずから見たわけではありません。数人の船長埠頭から二百ヤードほど沖合に停泊して、その惨事を目撃し、私に報告してくれました。そして、とくに彼らのひとりがつぎのよう語りました。第二の地震のとき〈王都全体〉が前後に波動し、あたかも強風を受けた海流のように隆起したのです。河底の震動が非常に強いため、大きな錨も係留から断ち切られ、水面をいわば泳ぎました。こうした異常な衝撃の直後に河流が二十フィートほど隆起し、すぐにまた沈下しました。その瞬間その船長が目撃したのは、沢山の人々が逃げ込んだ埠頭も沈没し、近くにいた小舟や帆船が河底の洞穴に吸引されたことです。あとになんら遺物が浮ばないので、その洞穴はすぐに閉じたと彼は推断します。こうした報告をあなたも充分信頼されてよいでしょう。なぜなら、帆船の消失はだれもが肯定するところであり、数日後に私自身真相の確認に赴きましたが、惨状のあとすら見当たりません。イギリス商館の人たちは爽やかな夕方その埠頭で行き会うのが常であり、私もそこで快適な散歩をしばしば享受したのです。付近の河底はどこも深く、測深されない地点もあるようです。①

ブラドックが目指したサン・パウロ教会は、地震の衝撃で倒壊し、全都を席卷する大火の火元ともなった。ここでの破壊の激烈さはペデガシエの素描『版画集リスボン荒墟の偉観』において描かれ、バティスタ・デ・カストロ著『地

① Braddock, *op.cit.*, pp.20-30.

誌ポルトガルの古今』にも教会の由来と建物の破壊が簡潔に誌されている。しかし、ブラドックの貿易商の書簡は周囲における民衆の惨状や、聖職者の挙動を伝える記録として独自の価値を有している。

さらに津波の襲来に関する描写は、この書簡でも迫真の証言のひとつである。リスボン大地震について筆頭に位する史料、モレイラ・デ・メンドンサ著『世界地震通史』においても、王都の洪水をめぐっては三カ所で記述されるにすぎない。しかし、高く評価されるブラドックの証言のほかに、同じく在留イギリス人の記録ではあるが、前節で言及した『ゼントルマンズ・マガジン』収録の無署名書簡や小冊子『怖るべき地震と火災に関する在留貿易商の証言』が鮮明かつ詳細である。「王宮広場へ避難してまもなく、群衆の間で恐慌が巻き起り、水辺から駆け出す人々が叫びました。〔海が襲ってきた。全市が水没する！〕動揺する人心はこうした警報にますます怯え、大勢の人々が破壊された市街へ殺到して、さらなる震動で倒壊する建物の下敷となりました。」「しかし、根拠のない警報ではありません。河流は一気に垂直十二フィートにまで上昇し、一分足らずで通常の水位に沈下するのです。」「こうした高潮は昇り、十一時頃発生したと思います。悲痛と絶望の光景は十二時頃まで続きます。焦燥と不安に駆られ、近くの海鮮市場へ避難しました。倒壊した我が家の廃残を絶望的な眼差で見詰める一家とそこで出会いました。」①

第三節 十一月一日午後 河岸地区造幣局 掠奪への防禦

リスボン大地震に伴う津波とセレイユは、イギリス沿岸部からアルジェリア海岸まで、さらにはスウェーデン南岸からボヘミア地方まで及び、古くからイギリス王立協会などの学術機関によって国際的な検証と研究が行なわれてきた。近年では欧州連合の執行機関、EU欧州委員会の支援による地球環境プロジェクト BIGSETS の一環として、マデイラ近海の海底調査も敢行された。しかし、リスボンにおける津波の被害については、いまもブラドックなどの証言に主として依拠し、現地での検証がやや手薄に感じられる。しかし、二〇〇六年ビエンナ・バスタラポルトガルの調査グループが作成した王都水害地図によれば、アルファマ麓の水辺を津波が襲い、王宮広場を越えては新街界限へ、さらにソドレ埠頭北ではパウロ教会やサン・ジユスタまで高潮が押し寄せた。なかでもブラドックが身を置いた河岸地区は、もともと広範に氾濫が及んだ地域である。②

貿易商ブラドックの震災記録 その三

各地で多くの亀裂や地割れを見ましたが、リスボンとその近郊で陥没したのは、私が知るかぎり、ここしかないです。また、ひとつの奇妙な現象も言い添えずにはおれません。対岸に邸宅とワイン貯蔵庫を持つ友人が語るころでは、家屋がまず大揺れになったため、家族全員が外に跳び出し、そこにも巨大な岩石がすぐさま落下しました。ここでも河流の隆起と沈下が見られ、周囲のあちこちで小さな地割れが数多く現れます。そこからあたかも〔噴水〕のように、清い白砂が大量に高々と噴出したと言うのです。明らかに大地の内部が極度の衝撃を受け、驚くべき結果を惹起しました。しかし、そうした衝撃がさまざまな鉱物の混合から発した突然の爆発によるか、空気の閉塞や乱流によるか、あるいはまた集積する地下水の突破口によるのかは、神のみが知り給うところです。確かな証左はないのですが、炎の噴出もあつたらしく、私自身は異常を感じないものの、幾人かが強烈な硫黄性臭氣に冒され、頭脳の眩暈、胃腸の不快、呼吸の困難を訴えたそうです。

サン・パウロ教区へ逃れてまもなく、第三の地震が発生しました。さきのふたつほど激しくありませんが、上げ潮

① Anonime, An Account of the late dreadful earthquake and fire, which destroyed the city of Lisbon, the metropolis of Portugal. In *a Letter from a Merchant resident there, to his Friend in England*, London, 1756. pp12-13.

② M. A. Viana-Baptista, Tsunami Propagation along Tagus Estuary (Lisbon Portugal) Preliminary Result. *Science of Tsunami Hazards*, Vol.24, No.5, p.332.

がふたたび押し寄せ、同じく急速に退いていきます。河からかなり離れた高台にいましたが、膝まで水に浸かり、近くの建物もいくつか水勢で破壊されました。このとき知ったのは、深さ六ファゾムの水上にあった船舶数艘が、激しい引き潮によって陸に乗り上げたことです。こうして大河は上げ潮と引き潮を幾度か反復し、いまやリスボンが数年前に都市リマを襲ったのと同じ運命に陥るかと思われました。もしもこの地が海に面しており、入江の湾曲によって波濤が弱まらなければ、すくなくとも低地帯の全域が壊滅したでしょう。

十一月一日直後にここへ到着した船長は、四十リーグほどの沖合で強烈な衝撃を感じたと言います。暗礁に衝突したと思い、測鉛を降しても、水底に届かず、理由も判りません。やがて王都の凄惨な光景によって彼の疑問は解けま見解でした。まさしく通常の航路を進めなかったある船舶が、一度は諦めた航行を、さらなる砂洲の震動によってなしたのです。こうして引き続き大きな震動が生じ、大河に甚大な影響を与えましたが、さきの地震ほど強烈ではないと私は感じました。しかし、ベレンへ向う沿岸の大道を騎馬で進む途中、疾風のように怒濤が押し寄せ、波に浚われまいと、全速力で高地へ逃れた、と数人が私に確言しました。

どこに身を寄せるべきか、もはや判断できぬ状況に陥ったのです。そこに留まれば、海からの危険に曝されます。河岸から遠ざかれば、建物の破壊に怯えます。ついに私は造幣局へ行こうと決意しました。その建物は頑丈な平屋建てで、河沿いの部屋以外が大した損傷を受けていません。毎日防衛する軍人の一団がそこらまったく消え、部隊長だけが玄関に立っていました。彼は貴族の息子で、一七歳か一八歳なのです。そこでもたえず大地の震動があり、(二十フイート余り離れた向側の建物もみな揺れるので、)きわめて危険の思われました。造幣局の中庭は水浸しなので、石材と瓦礫に埋まる館内へ避難します。ここで防衛の軍人と言葉を交わし、私は感嘆の意を示しました。兵士一同がみな逃げ出したのに、これほど若い身で勇敢にも部署を護っているからです。「大地が割れようとも、」と彼は応えませんでした。「自分を呑み込もうとも、部署を離れることなど思ってもみない。」この若き貴紳の気概によって二百万片の貨幣を蔵した造幣局が掠奪を免れたのです。これほど怖ろしい事態でなくても、かくも平静かつ沈着に行動する人物を見たことなく、彼を評価するすべを知りません。この将校とは五時間ほど会話できたと思います。それまでの絶えざる困苦で疲労困憊し、空腹のままでもありましたが、その日夕食を共にするはずの友人、都心部の最上階に住み、言葉も判らないので、おそらくもつとも危険な状況にある親友への憂慮は失わずにいました。こうして親友の生存を確かめるため、彼の安否を見届けることを決意し、将校に別れを告げました。①

『最後の日―一七五五年リスボン大地震の怒り、廃墟、理性』の著者ニコラス・シユラデイは、この書簡に綴られた造幣局防衛の段落を引用し、つぎのように論述する。「サン・パウロ街、渡船場のすぐ北に位置して、造幣局は都心で地震に耐えた少数の建物のひとつである。神の特別な加護によって無事であったとも言えよう。王国の莫大な金の貯蔵が、暴徒の掠奪から防禦されたことは、一層感嘆すべき事実であり、国王および一国がただひとりの青年に恩義を受けたわけである。」シユラデイによれば、そこに蔵される財貨がポルトガル経済の植民地依存と深く関わっていた。「二百万片の黄金は国庫金としても少額ではなく、外国からの援助がなければ、生存者の救済、行政諸機関の維持、リスボンの復興に不可欠なものであった。造幣局の防衛がなければ、リスボンは破壊されただけでなく、すくなくとも当分は死滅したのである。ブラジルにおける黄金とダイヤモンドの採掘にポルトガルは九分どおり依存し、工業と農業の確固たる基盤に欠けるため、金と宝石が小麦や布地、さらには海洋国家として恥ずかしくも魚介など、膨大な必需品の輸入の支払いに供された。」①

① Braddock, *op.cit.*, pp.30-36.

① Nicholas Shady, *The Last Day, wrath, Ruin & Reason in the Great Lisbon Earthquake of 1755*, New York, 2008, pp.58-60.

第四節 十一月一日夕宵 シアード地区アルマダ新街 住民の惨状

リスボン遷都五百年を慶賀する一七五五年、リベイラ王宮一带に華麗な行事が繰り広げられた。新年と公現祭の式典には貴族、顯官、高位聖職者、外国使節が参列し、国王に祝賀を捧げた。大斎節には恒例の祈禱行列が催され、聖ヨハネの祭日に王宮広場では楽団による盛大なセレナーデ演奏が行われた。リオ・デ・ジャネイロから九六日の航海を経て、三月に軍艦イエス降誕号が入港し、国庫に入る二五〇万クルザドと輸出品の代金五〇クルザドに相当する金銀を陸揚げした。王宮一带の記念行事は同月末王妃の誕生日を祝した王立歌劇場の落成によって頂点を迎える。間口三五ヤード、奥行六〇ヤードの広大な新歌劇場は、イタリアの建築家G・C・ビビエナによって設計され、著名な作曲家や歌手が莫大な報酬で招聘され。ここにはこけら落としには歌劇『インドのアレキサンドル』が上演され、二五名の騎手団の先頭に立つ闘牛士C・A・フェレイラの雄姿がたちまちヨーロッパ各地で評判となった。②

貿易商ブラドックの震災記録 その四

さきに通り返けた隘路へふたたび入るのは暴挙と考え、やや水も退いたように思われるので、サン・パウロの瓦礫を越え、河岸に戻るのがもつとも安全と判断しました。その道を辿ってアイルランド系の修道院、広大なコルポ・サント広場へ偶々出ました。ここの修道院も崩れ墜ち、ミサに参じた沢山の人が修道士数人とともに下敷きになっています。ほかの会衆は安心して立つたまま、瓦礫を見詰めています。この広場から造船所に沿って王宮への裏道を進み、さらにひとつの小路から主要道路へ抜けました。そこで私が棒立ちとなったのは、莫大な経費をかけて落成したばかりの歌劇場、ヨーロッパでもつとも堅固で壮麗な歌劇場のひとつが倒壊しているからです。その向側にあるブリストウ氏の邸宅を、巨大な石材の山塊、各々数トンもの巨岩が封殺しています。同輩であるワード氏が翌日私に語ったところでは、彼が邸宅の玄関を出る瞬間、一步敷居から踏み出したときに、歌劇場の西端が墜落しました。瞬時に後戻りしなければ、微塵に打ち砕かれたと言うのです。

そこから引き返して私は、リンカン・イン・フィールドの二倍もある壮大な王宮広場を目指しました。さきに述べた埠頭が広場の向側に築かれていましたが、もはやありません。しかし、こちらの通路も巨大な拱門から落下した石材で塞がれました。とくに私が憂慮したのは、国王ご一家が平素住む住居が倒壊し、地震のときそこにいたら、稀有な奇蹟のないかぎり、かならず逝去されたことです。通路を通れないと悟って、新王宮広場へ導く他の拱路へ転じました。王宮広場の八分の一の広さしかありませんが、そこには王室礼拝堂を兼ねた総大司教教会が一方の側に造営され、他方の側にももつとも壮麗な近代建築、おそらくそのためになお完成しない建造物が聳えています。前者については屋根と正面の障壁は倒壊し、堅固と思われる後者での震動によっていくつかの巨石が頂上から墜落し、到る所が破損したように見えます。その広場には御者や従僕や持主を失った四輪馬車、戦車、幌馬車、牽き馬、騾馬が溢れていました。

地震が発生したとき、神聖な儀式に参列していた貴族、貴紳、聖職者は、周章狼狽して逃げ出し、戦慄のあまり多くの祭壇の燦然たる聖器を放棄し、侵入者の意のままにしました。しかし、さしてこれを気に留めなかったのは、不幸な動物たちが苛酷な運命に翻弄され、極度に苦しんでいたからです。死ぬものも、傷ついたものも多少いましたが、大半は怪我もないのに、置き去りにされて、餓死を待つのみです。

この広場から友人の住居へ険しく長い道が通じています。そこで目撃した新たな光景はまさに言語を絶するものでした。ため息と呻き声しか聞えず、道で出会う人はみな、親友や近親の死を、すべての資産の喪失を嘆くのです。一歩進む毎に、死せる者か、死につつある者に踏み当りました。数カ所で四輪馬車が粉碎され、持主や牽き馬や御者と

ともに横転しています。こなたでは幼な子を抱き締めた母親が、かしこでは着飾った婦人、聖職者、修道士、貴紳、職人が息絶えたか、絶えつつあるのです。背中を打ち砕かれた者もあり、胸に巨石を受けた者もいます。瓦礫の下に生き埋めにされた数名も、通る人に空しく救いを求めるのですが、同じく絶命するよう放置されました。

気掛かりな親友が暮す住宅の真向へついに私は辿り着き、隣の建物もろともそれが倒壊しているのを目にしました。(ここで親友がもう絶命したのだ、と私は考え、)もはやいかにしても我が身だけ救おうとしたのです。一時間ほど王都から半マイル歩いて、イギリス人墓地の近く、モーリという人が営む居酒屋へ着きました。大勢の同胞とともにいま私はそこに留まっています。ポルトガル人もいますが、だれしも惨憺たる有様で、屋内へとても入れず、大抵は地面に横臥したままです。この時期夜は大気がとくに冷え込むのですが、そうした寒冷から身を守る覆いが、私にもほとんどありません。陰鬱な話題ばかり、とあなたは思われるでしょう。しかし、十一月一日における度重なる恐怖は、一巻を著しても言い尽せません。夕闇が降りるや、新たに現れた光景が、またしても私たちを戦慄させました。全都が大火に包まれたらしく、その明かりで文字が読めるのです。誇張なしにお伝えしますが、火災はすくなくとも百カ所へ拡がり、消火の活動も一切ないまま、六日間絶え間なく燃え続けました。①

親友の安否を尋ねてブラドックが這い登る坂道は、リビエラ王宮の建設に伴って開かれたアルマダ新街である。この道を進めば、総大司教広場から高台シアードに至り、さらにカルモ修道院に通じる。シアードにはロレート教会など名刹が多く、アルマダ新街の中程にはオラトリオ教会と修道会が位置した。貴重な震災記録を遺した神父マノエル・ポルタルは、この修道院の居室で最初の震動に襲われた。中庭へ駆け出した彼は、建物の倒壊で生き埋めとなる。重傷を受けたが、幸運にも同志の数人に救出され、より安全な地点に移動するのである。

第五節 十一月一日夜 リスボン市街 火災の拡大と盗賊の跳梁

オランダでは大学都市ライデンの週刊誌『ガゼッタ・ライデン』が、十二月二八日号で大地震の第一報を伝え、以後各号にリスボンの惨憺たる状況が次々と記載される。十二月九日号にはアムステルダムに着いた書簡数通が紹介された。「テージョ河に停泊した船舶は」とまず説明される。「大きな危険に曝されたが、破壊を免れた。」あるオランダの船長によれば、「地震発生ときは友人の家にいた。なにが起きたか判らず、庭に出ると、まず瓦が落ち、さらに障壁が崩れきた。瓦礫を押し分け、急ぎ河畔へ出た彼は、「首尾よく艇に乗り、自分の船の近くまで来た。その三日後再度確認に行くと、船にはなんら被害のないことが判明した。」②

各国からの在留民がとくに怖れたのは、震災の混乱に伴う犯罪の頻発である。『ガゼッタ・ライデン』十二月二六日号にはそうした状況がつぎのように報道される。「インド商館も壊滅した。一言で表せば、造幣局は別として、すべての公共施設が崩壊したのである。地震の被害を免れた建物も、火災によつて焼失した。震動に派生して数カ所から火の手が昇るとともに、混乱に付け入る極悪人が放火したとされる。自己の鉄鎖が外れた絶好の機会と、囚人や徒囚はこの災厄をみなし、街々での掠奪とそれを容易にする方途を考えた。残念にもスペインやフランスの兵士多数、さらにはイギリスの水夫若干がこれに加わり、災禍は二割か三割増大した。なかでも処刑の際にあるムーア人は最初の震動のあと七カ所に放火したと自供した。また、あるフランスの兵士は三カ所への放火を自白したが、そのひとつが王宮に隣接するインド商館なのである。」ちなみに同誌ではこうした報告のあとに、独力で造幣局を防衛した将校の功績が紹介されている。③

① Braddock, *op.cit.*, pp.36-42.

②

③ *Ibid.*, 26 decembre 1755, p.1.

貿易商ブラドックの震災記録 その五

地震に耐えたあらゆるものを火焰が焼き続け、絶望と恐怖のあまり大抵の人々は敢えてそこに踏み入り、食物や衣類を取り戻そうとしません。だれもが傷悲して黙り込み、炎を見上げて立ち尽すのです。僅かにそれを遮ってその夜は、十五分の休止もないほど、だいちが強震と弱震を繰り返し、そのたびに聖人と天使に加護を求める女や子どもが叫びます。

伝えられるように凄惨な大火が地底からの爆発に起因するか否か、私には判りません。しかし、今回の大惨事について当然三つの事由が考えられます。第一に十一月一日は万聖節、ポルトガルにおいてはもつとも重要な祭日であつて、すべての教会と礼拝堂の祭壇は、慣例として蠟燭や燭台で照らされていました。(二十以上の祭壇を備えた教会もあります。) 周りの垂れ幕や落下する木材にそれらが点火し、すぐさま近隣の建物へと拡がります。そこでは竈の火とも重なつて火勢は強まり、他の事由がなくても、一気に全都を焼尽するかに思われました。しかし、あなたには信じ難く感じられ、あまり公にされぬ不祥事をお伝えすると、最初の地震によつて障壁が崩れるや、獄中から常習犯が脱出し、壊滅を運良く免れた建物に、次々と①放火したのです。なにがこの呪しい悪業へ彼らを誘つたか判りませんが、証拠を残さず恣^ほいままに掠奪するためであり、これが一般の恐怖と混乱を倍加させました。

だが、そうした難儀をしなくても、彼らは悪業をなしたでしょう。なぜなら、宵闇が降りる以前に、全都が無人の野となり、これら忌わしい悪漢とその同類のほかは、ひとりとしてそこにいないからです。彼らのなかには掠奪以外の動機を持つ者もいたでしょう。とくに危険とみなされたひとりには、自分の手で王宮に放火したと、ガレー船で告白しました。彼はそうした行為を誇るかのように、王室全員を焼死させるつもりであつたと、息絶えるとき断言したのです。(その男は漕役刑を宣告されたムーア人と言われます。(原註△ やはり巷間に流布するのは、ブリストウ氏の邸宅が壮大な石造りの拱門のもとに造られ、優れて強靱な建築であつて、地震による被害も免れて屹立していたのに、同じ仕方で焼き尽されたことです。手短に言えば、事由はともあれ大火が王都全域を、すくなくとも大きなものと価値あるものすべてを破壊しました。今回の被害は数え切れませんが、いかに莫大であるかを以下の数例によつて判断頂けるでしょう。)

(原註△) 数日のうちにこうした悪漢の三四名が処刑されました。

王宮については特上のタピスリ、絵図、食器、宝石、家具等々のすべてで数百万に達し、併せてこれに隣接する総大司教教会では豪華な衣装と高価な装飾。(このでの儀式はローマ教皇の教会に匹敵する盛大さで行われます。) また、ブラガンザ宮殿に蔵されたあらゆる財宝、すなわち戴冠用宝器、極上の食器、金糸銀糸で刺繍された最良の絹タピスリ多数、ピロードやダマスクの壁掛けなどです。王宮の一角を占めるインド商館ではあらゆる贅沢品と香辛料。それらは向側の税関所へ来る各国の貿易商に属していました。そうした貿易商の邸宅や多くの商店に分散された財貨もすべて跡形もなく焼尽するか、消失したのです。最初の火災を幸運にも免れた家財も、運び込んだ空地で保全が難しく、周囲からの飛び火で燃えるか、人々の殺到と錯綜の間に紛失します。(個人の財産の行方をいくつか知っています) 脱獄した悪漢もそれらを盗み、この世の大災厄に二重の悪辣な利得を得ました。

建造物に関してはもつとも堅固な建物が総じて最初に倒壊しました。さきに述べた殿閣のほか、公共穀物市場の穀倉とロシオ広場の王立大病院もそうであつて、救貧院と呼ばれる後者には、親のない貧しい娘を収容するのですが、彼女らの大半は絶命しました。同じくヨーロッパにおいても大きく貴重な図書館を有する壮麗なサン・ドミンゴ教会と修道院。大理石のふたつの列柱に支えられた広大なカルメル会教会では、そこに祀られる聖女マウント・カレルの奇蹟像によつても愛寵される寺院の破滅を防ぎえないのです。際立つて重厚な旧大聖堂。大きさは異なるものの、サン・パウロ教会に似通う荘嚴な聖アウグスチヌス聖職参事会教会(サン・ヴィセンテ・デ・フォーラ教会)は、ヨーロッパでもつとも美しい建築のひとつと鑑識家に評価され、故ジュアン五世をはじめいくつか王家の遺体を安

置しますが、穹窿の倒壊とともに、そうした墓碑も粉碎されました。古文書や古い記録が蔵される城閣と城砦、聖なる間と呼ばれる異端審問所はかつてムーア人の宮殿であり、ここでは罪人を裁く最高法廷が開かれる。要するに建物の被害を逐一挙げるのは不可能であり、一言で表現すれば、ありとあらゆる教区教会、修道院、尼僧院、宮殿、公共建築、さらには無数の邸宅が倒壊するか、無惨に破壊され、脇を通ることすら危険なのです。(どの階にも家族が住んでいるので、)すくなくとも四十人が自宅で圧死しました。一方では即座に息絶え、他方では街路の落石で四肢を挫きました。大勢が礼拝に来て、荘厳ミサが始まったとき、最初の地震が発生したのですから、どれほど膨大な数の人々が、教会や修道院で絶命したか、容易に推断できるでしょう。これまでにいくつか事例を挙げましたが、以下の事実についての判断ください。

三百人ほどの修道士を擁する広大な聖フランシスコ修道院では聖歌隊の合唱のさなかに屋根が崩れ落ち、大祭壇の正面入口に通じる広い回廊も同時に破壊され、十八人の修道士を除き、無数の参会者全員が下敷になりました。サント・クララの尼僧院では一五〇人の修道女と彼女らの侍女。また、ベレンの街道にあるカルバリオ尼僧院では、合唱しつつある修道女の大半と参集した信者の過半。イギリス尼僧院もやはり倒壊したのですが、死者の有無は存じません。トリニテ修道院では千五百人絶命したと、確かな筋から聞きもした。他の教会や礼拝堂もその規模に応じてすべて被害を受けたのです。ロモエイラ牢獄では障壁の倒壊で四〇〇人ほどが死亡する反面、極悪人が脱獄してさらなる災厄を惹き起します。

焼死した者や後日死亡した負傷者を含めると、低く見積つても六万人以上に達するでしょう。ほかの観点からは被害の規模を把握できずにいますが、広大で殷富な王都がいまや広漠たる荒墟にすぎません。富者も貧者と同じ水準に凋落し、先頃まで安楽に暮らした数千の所帯が、田野を放浪して、あらゆる生活の便宜を求め、孤立無援の状態にあるのです。①

潰滅した公共施設のなかでブラドックら貿易商にとりわけ係り深いのは、王立税関所とインド商館であろう。世界各地の名産が山積みされるインド商館は、リスボンの栄華と奢侈の源であった。海洋国家における貿易政庁の設置についてシュラデイはつぎのように語る。「東洋的なものに対するヨーロッパ社会の憧憬を充すのに、東端の佳境ポルトガルはとりわけ好適な国柄であった。画期的なガマの航海からほぼ一世紀の間、後、この国の武装商船と軽快な帆船はアジアへの航路をほとんど独占し、インドの胡椒と木綿、インドネシアの香料と香辛料、中国の絹糸と陶器、さらにはアフリカの奴隷の取引がポルトガルを富裕な一国に発展させた。こうした財貨のすべては適切にもインド商館と名づけられた王立の商易機関に収められる。こうした支配権を保持し、ポルトガル帝国の形成を目指して、散在する領土ではあるが、戦略的な要地、すなわちアンゴラ、ケープ・ヴェルデ諸島、モザンビーク、ゴア、ダマン、マカオを征服するか、植民地にしたのである。」② こうしてどの貿易業者もポルトガル王権の監察と認可を受ける一方、個人的な店舗で取引する場合も、大量の商品についてはしばしばインド商館に保管を委託した。また、リヴィエラ・マルケスは著書『ポルトガルの歴史』において、この商館が「近代的な行政機構と総合的な貿易港の結合」であると概括する。「インド商館は海外商易と貿易行政の全体的な枢要機関であった。インドへの輸出、東洋からの商品の陸揚げ、関係業者への産物の配分がそこで監察を受けた。すべての取引が国王の名において制御される。植民地行政官の任命、原則的な法規や個別的な条項の改正もインド商館をとおして公布された。そこには古文書や経理を担当する部署があり、海外からのあらゆる書類の受理と登録、さまざまな船舶の装備、軍事的防禦、確保が監察

① Braddock, *op. cit.*, pp.42-52.

② Shradly, *op. cit.*, p.84.

された。」①

第六節 地震発生の数日後 さまざまな被災者の状況

リスボン大地震については知識人や聖職者に綴られた詳細な記録が遺されるものの、一般のポルトガル人による証言が遺憾ながら僅少である。他方在留の外国人、とくにイギリス人貿易商の報告は数多く、地震研究の貴重な典拠となっている。本稿で論究するチエイズおよびブラドックの書簡はなかでも際立っているが、ここに貫かれた透徹した事実認識と達意の文章表現は、他のイギリス人の報告にも共通して認められる。

『ロビンソン・クルーソ』の著者ダニエル・デフォーは、一七二六年に刊行された『イギリス商人大鑑』のなかでつぎのように述べた。「イギリスの商業がいかなる国のそれよりも重視されるのは、以下の理由によると強調したい。一、自国での消費のみならず、他国への輸出のためイギリスでは、世界のいかなる国におけるよりも多くの商品が生産されること。(しかも、それらすべては自国の農作物か、イギリス人によつて製造されたものである。)二、異国で産出されたり、加工された品がイギリスでは世界のいかなる国よりも多く輸入し、消費すること。三、そのためイギリスではヨーロッパのいかなる国よりも多くの船舶を必要とし、多くの乗組員を雇用すること。」^② そうした物資を取引する商人の養成として、デフォーは事物に対する綿密な観察と幅広い知識の涵養を強調する。「商人は製品の種類や特質を知るだけでなく、それらがどの国のどこから来たか、栽培されたものか、製造されたものか、いかにイギリスまで運ばれ、いかに卸売りされ、いかにすれば得になるかを熟知する必要がある。」^② さらにデフォーは商人の要件として簿記などの丹念な記帳とともに、書簡の重要性を指摘した。「国内で営業する商人についてすらこのような知識と能力が求められる以上、海外との交易を担い、より高い社会的地位にある貿易商には一層豊かな精神形成が必要であつた。しかし、伝統的なグラマー・スクールやパブリック・スクールは、実学的な要素が貧弱であり、大商人や貿易商の多くは商業都市に群生するプライヴェイト・スクールで学んだとされる。たとえば、ロンドン近郊のイズリングトン学園は軍隊、海運、商業、貿易などを志望するジェントルマンの階層に、全寮制によるコース別教育を授けるものであつた。また、生徒数三十に厳選するサルフォードのランカシエアー学園では、つぎのように授業時間が組まれていた。「月曜と金曜の授業が総合的な文法を扱い、英語、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語、フランス語、その他近代語の精選された本格的訓練に当てられる。金曜には作文と記帳に専念し、あらゆる種類の勘定書、契約書、書簡文、商業文を学ぶ。水曜と木曜とは個々の生徒の能力と希望する職業に応じて、算数、簿記、数学の種々の分野を勉強する。そして、土曜に教える課目は、地図、海図、地球儀、太陽系儀を伴う地理と天文である。これらを適宜自然哲学や経験哲学の特報に代え、新たに開発された多様かつ精巧な機器を用いて多くの実験を会得させてもよい。なおまた、生徒の天分や好みに応じて、絵画、線画、建築、速記を適時学ぶこともできる。」^③

長文の震災記録を遺したチエイズとブラドックの学歴は不明であるが、やはり財力に余裕のあるジェントルマンの階層と推察される。チエイズと親密な貿易商アンボワーズ・ゴダールはイングランドの名門貴族の家柄であり、同業者のブランフィルはシティの大商人の子息であつた。のちに述べるとおり、ブラドックの親友のひとりイギリスの高位聖職者であることも、社会的地位の高さを感じさせる。

① A. H. De Oliveira Marques, *History of Portugal*, volume I, p.262.

② Daniel Defoe, *The Complete English Tradesman in Familiar Letters*, London, 1726, pp.4-5.

③ Nicholas. A. Hans, *New Trends i Education in the Eighteen Century*, London. 1951. pp.92-93, 96-97.

万人の艱苦という状況のなかでは個人の運命に注目する余裕はないように思われます。しかし、不幸な被災者の事例をいくつか語らずにおれないのは、私自身が彼らの知己であり、あなたも彼らを多少知っておられるからです。まずペリシヨン夫人ですが、最初の揺れで彼女は夫とともに自宅から駆け出します。数歩前を行く夫が気づかないうちに、突然倒壊した建物の瓦礫に、彼女は生き埋めになりました。あとに続く彼女を確かめるため、夫が振り返ると、姿がまったく見当たりません。そのような場で捜しまわれれば、己の命まで失ったでしょう。第二の事例であるヴァンセント氏はかなりの期間リスボンを留守にし、十八レグア離れたマルティノなる町にいました。しかし、不吉な星に彼は王都へと誘われ、清遊をすべく運命の日の前夜戻つて来ました。眠り込んだ彼は、着衣する余裕もなく、家から出る前に突然の圧死を遂げたのです。友人による幾多の捜索にもかかわらず、遺体の一部と思われるものが腐敗し、折られ、砕かれて発見され、運搬も困難であるため、そのまま廃墟に埋葬された。一層悲痛な事例を最期に申しましよう。ロンドンのホルドードの弟は謙虚で温厚な若者ですが、街に出て教区教会の正面へ来たと、最初の震動に襲われ、落下する巨石で両足を挫きました。負傷したまま立ち上がれず、救いを求めたのですが、通行人も狼狽して応じません。ようやく情愛あるポルトガル人が彼の叫びに動かされ、腕に抱えて教会へと運びました。街路よりも安全と思つてそこへ入った瞬間、第二の震動が教会の門口を粉碎し、教会の建物全体が炎上しました。謙虚な若者、救助したポルトガル人、避難のため入った多数の人々がみな哀れにも焼死したのです。

最初の動揺から数日後私は思い切つて市街へ降りて行きました。もつとも安全な道を選び、まず我が家で取り出せるものを確かめたのですが、荒墟は火災によつてさらに壊滅し、自宅の位置すら判りません。石材や瓦礫の山々が幾重にも四方に連なり、街路すら確認できないのです。多年その地区で働く海運業者は、家々の位置を熟知しており、数日後彼らをふたたび市街へ赴きます。そうした支援によつてようやく自宅を突き止めた私は、作業の危険はさておき、なにかを掘り出したとして、経費のほうが高く観念しました。そうした未練をさらに断ち切つたのは、荒墟になお煙が立ち籠め、私にとつてもつとも価値ある品々も、当然炎が台無しにしたと考えたからです。

二度とも私の探索は徒労に終わりました。とりわけ最初には遺体から耐え難い悪臭が発生し、悪心で倒れるほどでした。体温が高くなり、重病ように感じたのです。いま思えば、それほど大事ではなく、神の恵みによりまもなく恢復しました。しかし、これによつて私は以後慎重となり、悪臭が甚だしく、感染を危惧されるところを通るのは避けました。ある貴紳の話によれば、地震から数日後市中へ行くと、犬に噛み裂かれたと思われる肉体がいくつか街路に散乱し、なかば火傷したり、完全に焼かれた遺体も数々ありました。特別な地点、とりわけ教会の出口では遺体が累々と重なり、小山をなしたと言われます。

どれほど法外な破壊がなされたかを推察頂くために、ひとつの事例を申しましよう。イギリスの古い市門と同じように高樓の拱路が旧大聖堂西門の正面にあり、その左側には高名なサント・アントニオ教会が、右側には高層の民家数棟が建っています。これらの建物で囲まれた空地は、ロンドンの小さな中庭よりも狭いのです。最初の震動のとき拱門の下を歩く人々は、この空地の真中へと避難しました。両側の教会のなかにおいて、脱出できた人々も、やはりそこへ駆け込みました。その瞬間教会の正面や隣接する建物とともに、拱門自体が地震の衝撃によつて左右に傾き、空地に避難して立ち続ける全員を生き埋めにしつつ倒壊したのです。遺体を掘り出し、近くの野原へ運ぶため、この数日人夫も雇われましたが、その大半はなお瓦礫の下にあり、それらの移送が可能であるとしても、悪臭を懸念すれば、安全とは思われません。噂によれば、国王はベレンに新たな王都を建設する意向も示されたようですが、従来の王都の再建が適切とされても、ながく放置されたこれらの遺体が完全に処理されるまでは、到底考えられぬことです。(原註A)

この凄惨な大惨事についてきわめて異様な要素を含む一例だけを、最後に述べましよう。当地在住のハンブルグ貿易商ブルマスター氏は、ハンブルグに住む共同経営者から震災前につきのような手紙を受け取りました。自宅に保

管してある大量の亜麻と他の価値ある品々を、王都の各地に設けられた倉庫に移すよう勧める。なぜなら、リスボン全都が炎上する夢を、その共同経営者は二週間毎に見たので、この警告を活かしてほしい、と。その手紙をブルマスター氏はだれにも見せるので、話の信憑性は確かとお考えください。助言の源が超自然的な警告によるのか、たんなる偶然の所産であるかは、さして重要ではなく、ブルマスター氏はそれを完全に無視しました。こうして彼の財産は隣人たちの財産と運命を共にしたのです。

親愛なる友よ！私の脳裡に深く刻まれ、忘れ得ない怖るべき審判について、完璧ではないが、忠実な報告をさせて頂きました。すべての財貨を私は失い、持ち出した衣類も肩に背負うものだけです。もつとも未練を感じるのは、二度と得られない書籍と書類です。自身の艱苦に加えて、さきに言及した友人たちも、やはり悲惨な状況にあります。あらゆる苦難に曝されていますが、手立てなく絶望に沈むよりも、むしろ全能の神に対する感謝の気持に帰りつつあります。数千もの人々が絶命した危機の最中に、まさしく神は私の命を救われたのです。こうした恩寵が今後も私を護り、種々の苦難から脱出する方途を示されると信じます。

当地はなお無秩序と混乱の状態にあつて、治安にあたる行政も停止し、いつ商売を再開できるかも判らないので、然るべき便宜が得られれば、早急にイギリスへ帰りたいと存じます。 敬具。

(原註A) ポルトガルの城砦都市エストレウマヅラは、リスボンから約一マイル、テージョの北岸に位置し、市内への立入りを規制するよう造られています。河を遡上する船はすべてここに立ち寄ります。また、そこにはポルトガルの歴代の国王と王妃が葬られています。①

自身の業務内容についてブラドックはほとんど述べていないが、遙かなマデイラ島にまで出向いたことから、ワインの取引業者である可能性が高いと思われる。大西洋海嶺に接するこの島が、ポルトガル海岸よりも北アフリカ海岸に近く、リスボンからマデイラまでの直線距離はリスボンからパリまでのそれより大である。男盛りの貿易商がたんに保養や観光のため、遠隔の地へ船旅をしたとは、考え難いからである。

ちなみに一七五六年一月にはイギリス王立協会でマデイラ島被災の証言が披露された。「マデイラ島の都市フンシヤルで」と同協会会員の兄宛書簡でトーマス・ヘバーデンは語る。「一七五五年十一月一日午前九時半頃地震が感知されました。最初の兆候は空中の轟音で、石畳の路上を空の荷車が疾走するかのようでした。すぐさま床が小刻みに震えながた大きく揺ぎます。窓はかたがたと鳴り、家全体が震動するように思われました。」地震発生から一時間半後津波が押し寄せ、高潮は港の水位標の上限を垂直十五フィートも超えた。「この島の北部では氾濫がより甚大であり、最初に海が約百フィート背流したあと、突然反転して沿岸へ浸水し、いくつかの住居と小屋を破損しました。さらに、各所の門口を押し開け、商店や倉庫の壁もあちこちで倒壊させ、退き際には多量の穀物を奪ったのです。こうした事態によりワイン酒の大樽二百あまりを流失したと推算されます。大量の魚介が沿岸やマキコ市街に置き去りされました。」②

第七節 一七八〇年 ロンドン ブラドック書簡の刊行

リスボン大地震から三十余年を経た一七八七年、チャールズ・デイヴィ著 『文学の主題に関する若き貴紳への手紙』下巻に、この書簡の全文が執筆者ブラドックの名を付して掲載された。標題のとおりデイヴィの著書は、文学

① Braddock, *op.cit.*, pp.52-60.

② Letter XVII An Account of the Earthquake in the Island of Madeira, Nov.1, 1755. *Philosophical Transactions of the British Royal Society*, Volume XLIX Part I, 1755. pp.432, 434.

を志す人たちに詩作の技法を順次教示するものでり、上下巻千頁にわたり七十余通の往復書簡が収録されている。これらのほとんどは詩作と韻律に関する論議に終始し、大地震に関する証言が混入するのをやや奇異に感じるが、下巻の冒頭に左記のような書面が紹介にされる。

チャールズ・デイヴィ様

一七八〇年十月二四日 差出人 無署名

拝啓。一七五五年十一月一日のリスボン地震に関する証言を、再読したいと希望されましたが、いまどこにあるかわりません。しかし、できるだけ早く暇なときに、乱雑に積まれた書類を調べ、来週半ばにもお送りできるよう努めましょう。この報告はきわめて興味深いもので、怖るべき日の錯綜する惨状について、世に知られたよりも一層委細で明確な記述、思うに真実に一層迫る記述を、長さ数頁に含むのです。書簡の形式でブラドック氏によって綴られ、ノルヴィッチ司教区の宗教法顧問、畏敬すべき碩学サンドバイ様に宛てたものです。ブラドック氏はサンドバイ様の親友で、リスボンの英国商館に関与し、忌まわしい大惨事勃発のとき現地にいました。①

デイヴィ宛のすべての書簡と同様、ここにも差出人の氏名は記されていない。しかし、文学の技法を学びつつある人たちと、この手紙の執筆者はやや異なる知己と思われる。高位聖職者からこれを預かった彼は、書簡の内容を高く評価し、広く世に知られるよう望んでいた。

公にする必要をブラドック氏が当面感じないとしても、(原註A)、かくも正確で精細な証言を、サンドバイ様の承認のもとに、将来出版するかも知れません。傑出した天分に恵まれても、かならず自己の真価を世に認められるわけではありません。慄然とする凄惨な光景に直面して、生来の沈着さによって彼は超人的な存在となり、寛厚で博愛的な心情によって大いなる栄光に輝いています。語られた体験のすべてを貫くと思われるのは、彼の行為の基調、敬虔と徳操という原理です。

(原註A) そうした出版が社会的に是認されるに至りました。出版社の情報によれば、いまやブラドックが逝去してから、多年が経過したのです。②

こうして下巻における第二の手紙としてブラドックの一七五五年十一月十三日付書簡が掲載された。『若き貴紳への手紙』の著者デイヴィが、いつこの書簡を初めて読み、なぜ再読を思い立ったかは不明である。この書物においてリスボン大地震に係わる他の文書は、一七八〇年十一月十二日付の無署名書簡のみである。ここでは「ブラドックの証言をいわば補完するものとして、震災の翌年数部のみ印刷されたオラトリオ会アントニオ・ペレイラの小冊子」が紹介される。ペレイラ神父の小冊子はラテン語の原文に英語の対訳が付せられ、大地震に関する重要な史料のひとつである。一七八〇年の無署名書簡はほぼ小冊子の要約に尽き、ブラドックの記録については手短かな言及に止まっている。③

『若き貴紳への手紙』に集成された膨大な往復書簡は、一七七一年以降なんらかの定期刊行物によって順次公にされ、ブラドックの証言も一七七四年頃から一定の人々には伝わったと推察できる。以後彼の書簡は的確で綿密な震災記録として多くの書物で採択されたものの、史料の扱いとして必ずしも十分な配慮を受けていない。一八七一年

① Charles Davy, *Letters addressed chiefly to a Young Gentleman upon Subjects of Literature*, London, 1787. volume II, pp.1

② *Ibid.*, volume II, pp.3-4.

③ *Ibid.*, volume II, pp.114, 119-120.

に刊行されたカルノタ伯爵著『評伝ポンバル』にあつては、ブラドックの震災書簡の大半、冒頭の数行と最後の数頁を除く全文が転載され、リスボン大地震に関する著者自身の論述は省略された。しかし、この転載においても原典の書名と執筆者は明らかにされていない。② また、前述のとおり、近年の労作であるシュラデー著『最後の日』でも、大聖堂の倒壊、津波の襲来、造幣局の防衛に係わるブラドックの叙述が引用されるものの、これら貴重な証言の執筆者は不詳とされる。おそらく『若き貴紳への手紙』への収録とは別に、無署名の稿本あるいは複本が存在し、そこから典拠の曖昧な事態が生じたのであろう。

初稿 二〇一三年九月二六日

改編 二〇一九年八月二六日